古き歌より

吉田英資

無口なる男ぞよ、久におとづれてよくかたらぬを友はゆるせよ。

何なくとどまりてゆけといふ友をいなみかへりしあとのさみしさ。

いづかたも稲かりほせりけふはわきてたちねたちの戀しうなりぬ。

寒がりの母はいかばかりなやみおはす日に日にまさるこの寒さには。

からからと梧桐の葉のなるがきこゆ裏町めける街を歩めば。

たゝひとり歩めば砂利を踏む音のとくるがごとくひゝく朝かな。

兄と思ひ吾をたのめるみなしごは今日もかなしきふみをおくれり。

ほこりかにわが前に立つ初夏の山はゆたかに朝の陽をあぶ。

はしきよしあかく小さき姫百合は茅にかくれて咲きのこりたり。

朝濕り寂かに土を見てをれば木の影うつりやがてまたきゆ。